

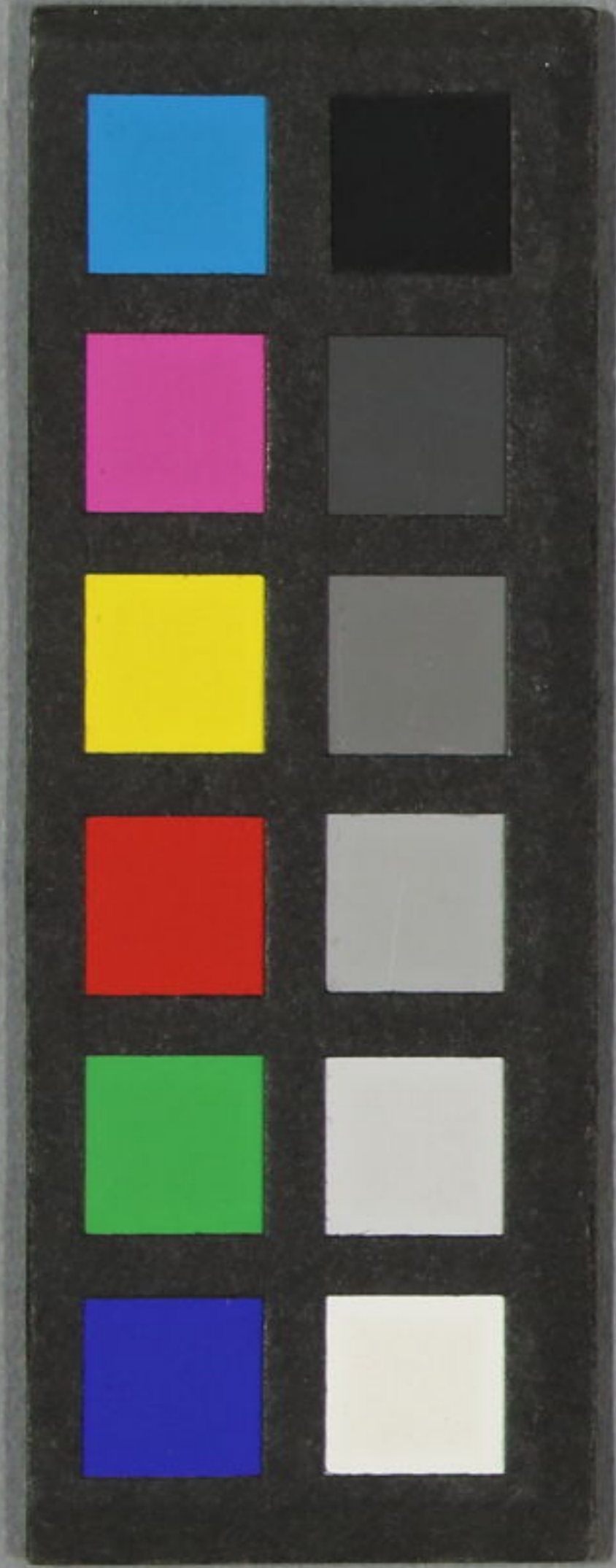
明治
新撰

俳諧七百題

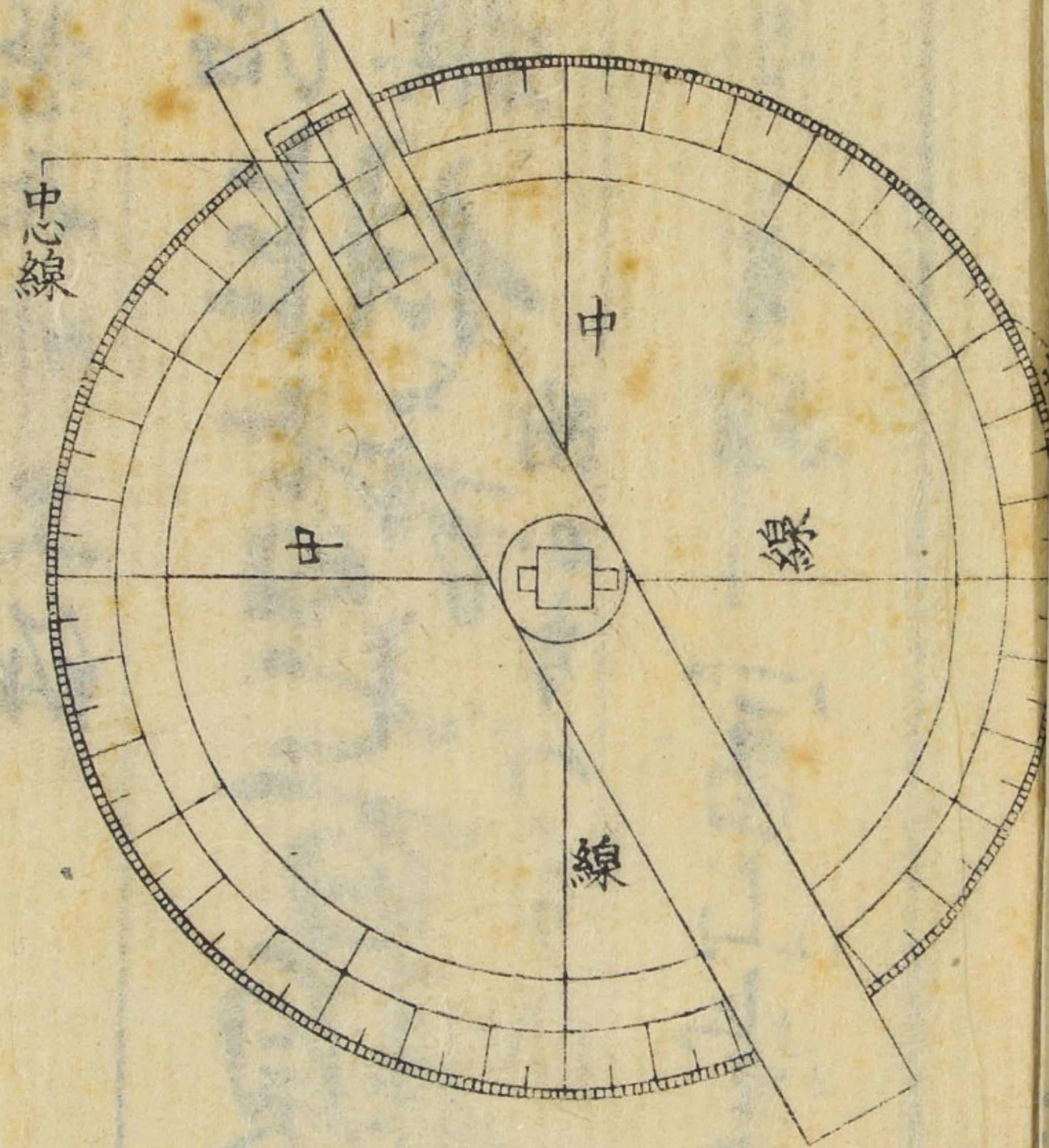
附
加家法

之

5
697
1



同盤の面之圖



圓周を三百六
まわす
 十分小刻と其
きざし
 一分を二度と云
おど
 又一分ともいふ
すゐい
 隨意小唱ふ
とま
 屋

俳禪東國翁補閑
章誓在作史編

明治
新撰
俳諧七百題
完

附かぢぐつひ

東京 書肆 富山堂藏

明後 新撰 俳諧七百題 目次

卷之上

一切字之格	種	一 漫興	甚友秋冬
五十韻呼法		一 似類	卷之下
一 東京名所花鳥曆		一 送別	甚友秋冬
一 紀形附名所	甚友秋冬	一 贈答	甚友秋冬
一 留別	甚友秋冬	一 題画	甚友秋冬
一 頌詠	甚友秋冬	一 懷舊	甚友秋冬
一 悼附遊覧	甚友 卷下	一 賀	甚友秋冬
一 意	甚友秋冬	一 雜	
一 祝詞唱法	甚友秋冬	一 序歌曲之事	
一 菱句案方之事			

目次

○

利門
697
卷

東
餘
印

抄
撰

俳諧七百題卷上

一 文字兩旁三	一 以上同次終
一 以貫之	一 第三之事
一 五服之事	一 韻礎之服
一 風曲	一 句之死活
一 寓言	一 風情
一 悠遠	一 風艷
一 有心	一 無心
一 五躰之傳	一 八休函玄
一 虛實正之傳	一 俳諧
一 音通之親句	一 正親句
一 連聲音通之事	一 連聲親句

○切字之格

俳諧東宮先生補元

明齋
野村
史
政
三

氏
寄
贈

月
中
何
の
新
法
は
負
法
也
於
中
於
一
更
不
可
不
試
み
様
重
新
元
の
中
於
一
の
も
お
も
を
り
了
了
武
喜
あ
ら
ば
名
も
知
る
山
も
知
る
廣
翁
之
も
や
勝
き
や
難
の
も
の
活
り
爲
空
元
の
中
於
一
の
も
お
も
を
り
了
了
武
喜
あ
ら
ば
名
も
知
る
山
も
知
る
廣
翁
之
も
や
勝
き
や
難
の
も
の
活
り
爲
空
真
立
也
道
原
不
と
傳
る
神
矣
乃
非
許
六
以
星
也
極
定
め
ぬ
山
水
法
也
宗
賢

卷上 切字之格

○一

○けり部

佛しきも二ツの鴨ふ笑ひら
 道をこの木権はるふ味せ 免
 枯枝ふ腐のと腐り免然乃 香
 百味芭蕉ふのうて我きや里
 東の 然ハ風才りてもあるや里
 麻乃聲公ふ角ハ南うりや里
 露やりり枝ハ於此山あるに
 言水 免 全 其角 世枝 乙由 言水

○けきの部

えりふ回あのりきききききき
 迷因小枝のうるふを目出たけれ
 中ふ聖えるそおくけき
 是てはお家おけき様
 菊 世枝 更知 智月

○たり部

清水ふらうう出あり春乃月
 海ふううてふまきたり雲の山
 是つ運子またり更 衣
 松の月枝ふかけたるたり 毎里
 然の雲尾上此枝をはまきたり
 鴨の葉此見一たりある隠れたり
 於麻売の森あり起るり我此西
 詩六 多味 宗瑞 東山 其角 法通 野經

○ありの部

宵の月西ふ葉の波田照所
 嘗を守原きハ松乃有き乙
 平家之右平記ハ月小見片
 分入を人乃背石之山ゆく 路
 如新 忌明 其角 希因

○いづれ之類

笠寺いづれ六月乃ぬり道 翁
大宇の尾いづれ引ねり 音 史部

○いづれ之類

猪鹿もいづれふきき 鶴 合 岸白
生むとを敷片ハ吐ふ紫 喰 支考

○あふ之類

阿ふは肺老法帝ハ行 鷹 翁
阿を足を彼岸の夕ハ人あうり 鬼費
魏祭母屋の業ハ法者ハあふ 嵐雪

○いづれ之類

いさけハ雪見ハ姑ふ愛中を 翁
若やうふいさ達来ハ法醫斗配り 岩翁



いさけハ中ハ世む山きハ言 一族
亦極といさ言ハ葉ハハ法む 以之

○いづれ之類

青簾あふは揚ハ 翁 翁
牙細不入日深ハ 姑 西法ハ 来山

○いづれ之類

延きもの中ハ西江ハ川延 様 山川
二部ハ鹿踏蹴ハ川 部 公 老明
いねハ人ハ山ハ事ハ年ハ法 翁 政通

○あふ之類

登平泥茶落ハそあハ 法生ハ 翁

○とそ之類

森交ハ何ハしハそ思ハ 禁 棚 至明

一之部

旅路より一處ハ由是乃夕月夜
 羨しおもひ切るとき猫乃 意
 あかかほしきふららる蟬の聲
 茶燈大板中ふららるる
 系様少し一鬼のほろもよ
 夕影ふ山伏はきふ星の落し
 秋の四押ても霧は文 高し
 鮎の子は心は清し 濺は 青
 臨ふの蟬ふかき一室より 毎
 雪の松林は名れハ程空し
 門ささく世間ハ空し 燈し
 晴道てとの時果し冬は月

翁 瓶人 松風 青文 杏吐 如行 木芳 鼠雪 杉風 燈足 樓雲

孫の家は分ちたふし冬乃自
 年籠本の留は灯籠名跡おし
 名は清くぬまかき世ハ山 櫻
 之まは乃廣葉葉し 餅 粽
 統述し 美を毎かきし 鮎の 飯
 人公四月新し 穀 の 垣 漚角

母斛 利令 櫻葉 紫翁 屋考 漚角

〇を之部

美人のまはるしきもはを唐草子
 かろひたる粒ありきちを松 楓
 田草を情中の上残日 燈 燈り
 松乃葉ふつむ心を蓮 飯
 正杉の里城鷹は 山わの 意
 麻乃聲 あり 松ハ河を張て 意

翁 瓶人 松風 青文 杏吐 如行 木芳 鼠雪 杉風 燈足 樓雲

○世之類

竹表を近江乃人とおく美呂
牧柱の陰木のくくと云の自
葉葉吹風きくくと自赤く
相乃葉とおおくと初阿くし
仲の家風ふきくくと阿の通り
終乃葉吹やとおえと宮ふき
きくくと阿の葉いと阿の
阿の目此をや葉吹と阿の
阿き吹と阿の葉吹と阿の

○比之部

木曾の慶も末とあるぬふ後の月
西面乃く小野中の林此

菊 菊 乙由 城人 助理 子川 性然 牧童 菊

松明子山吹為き秋姓道
おもふ子只一夢小維子此夢
縦有小蝶の葉法とる二日門
雲の男小星を居る子
物の名もそれを花ふり
空ハ誰れ母とある葉
生乃魂を法とる魚法とる
刺たてし法あり葉とる能乃
若穂拾ふ鶴ふり日此歌法
ありくハ思案も遊ふあり
雪ハ世のハ高ふとる
葉付ハ其字共小枯か法とる
兼好ハ死ねと云ふた人年

野水 桐白 松花 智月 臺平 高木 虎洞 曲葉 乙由 猿権 乙由 松風 支考

群味皆何くを其の聲とてや先
二つ何くを其の聲とてや先
濁酒のささるるを教を先
人象をかき出さるるを先

○先之部

あかろく一里清くを其の
味み足ぬ連く風吹神送り
南風概也後始かき一先く

○先之部

法乃雲鐘の上燈く清
峰の葉は物いづく何の
雪は手を雪とて鳴れ始くいれ

○先之部

初機又進く一先候を先
果手高く反響を先

○先之部

涅槃縁赤き表具を月不立
夏衣白きハ物も手は法り
衣衣涼くきと結ハ赤く
表年のよきと知れは
又何く和手と云は
静くは結縁散玉思はは細代

○先之部

初機のおとめくを其の
初結のふくを其の
響の葉は機乃結波を月ハ入

年寄者ハ短キ物ニ寄余ハ奴
桑梓之目出たぐ成奴初月後
秋の蟬隙子成 以て追出 奴
出山 出山 出山

○け之部

雪の雫子あり鳴け 節 公 雪武
原小風煙く毒て吹け 酒乃 泡 荒雪
此腹を招かずとおけ 爲 結 藤 木常
程々空草 及せぬ者此 藤 拂 出 高云
もろゝの木の實をこゝ 節 結 出 四友

○せ之部

長而乃雲次出せ者あり 一
一月ハ桑小末かせ 結 あり 一 ぎ 宗堂
程 難 乃 裁 進 也 也 結 難 一 ぎ 文学
以て

○て之部

知りくと木は葉動きて 結 不定 鬼貴
脚互切者未けし 生々 結 抑 菊
又ヶ月ハ 柱て 程公て 小生り 引 白尾
花と吹く風かて 生りて 程の 実 知是
而 陸 幾 止 ち 脚りて 桑 水 甚 尚云
皆 ありと 牛ハ 足々 居て 難 乃 甚 多碎
意 心 者 小 者 公ハ 甚々 細 代 古 文考
世 爲 誰 小 あり 者 々 矣 儀 任口
七 捕 の 人 小 思 ぬ 々 難 也 以 咫 尺
○ね之部
桑乃 以て 以て 桑 乃 甚 結 以て 以て 楓竹

○へ之部

老を帝尊おもしきの小帝子
ああらち交りこちう一後りち
来月ハは家て呼ハ家法 主
古義

○れ之部

是てま特命おしひきはらうそ
権左とを権小書けき喜乃而
常北家小取き家ハの愛の落
おめふ人おこれれ地乃末 珠
風意きまうは下の石 冬
珠元小月まそ出き細代 古
治の生けりかひあき年乃 著
霜

○よ之部

年や美とあめも出上取守の自
宗禮

蓬葉小児送かろ目出さ此よ
探入あち物引美せよ 雲乃本
五位六位色こ此マせよ書 竿
星月秋雲は度まよ大き此と
屋小ふあ士あふ後の月名せと
素

○か之部

聖まの令聖鳥る月此はふらそね
雲梧校口等て居てふきけん方
楓声

○そ之部

葛樽の神ハ以のきそ秋乃 雛
石女は雛かろつと持袋 神子
河軍持葉のる人乃 長 刀
かろる台も大切ありそ雲はか里
誰然

艸也木也か之結ゆ一を別霜
遊如とて法の之根ひを根かき
氷室出取の空ハ以序生を其
口元不何る名を何きハ艸の是
何し附よふ堂也法案了事了
子英

○とも之部

たふふ何るたふふあるともハ極
何空更と空のあるともハ由は月
麻父
鬼堂

○べり之部

ふ魚乃志極き鳴も屋取ハ一
幼童比踏かると人小徳多ハ一
學比雲ありハ一空も空了ハ一
山悻
和及
野水

○二字切之部

幼吉桑登ふ也やう几編為世む
涼帝

し多や海りか一甚ハ程早ハ一

紫陽花や海屋ふり敷ハも世り
公所

熊ふり尻に松魚ふり尻に魚汁
其角

棚柱やよぬ変りり家りけり
公様

粒風やふ木はりふ法理らむ
去来

鏡末也法こそあふん近橋殿
史部

有ハ一とよまの世徳の小根ハ一
氷花

麻の吟佛ハ其屋ハ粒佛ハ一
物居

麻留中ハ留をむくけけ男取里
尾全

其末や手出ハも空ハ根ハ一
文学

道平忌や掃子ふりり
乙由

結くてもよハ結ハ倉取ハ一
為公

切字之格終

小	秋	町	日	隔	一	道	三	年	乃	音
鉢	叩	一	秋	葉	先	乃	物	か	ぬ	り
手	習	流	師	老	一	把	大	枯	曳	
指	ま	せ	て	か	く	了	人	冬	乃	撰
文	若	乃	生	物	株	名	衣	耐	り	
法	め	さ	は	才	よ	市	通	光	空	月
新	く	も	葉	袋	お	少	の	年	の	書
切	賣	此	鮎	不	幾	人	在	乃	之	意
物	の	意	や	む	時	置	の	脱		月
										菊
										山
										知
										其
										角
										其
										凡
										荷
										山
										菊

○漫興春之部

草と蟬と公乃唐茶と
 沙の乃乃おのひ出は梅 外 菊
 四十の春を中びて
 兼好の死ねとよたふ茶乃 春 又春
 本あり
 若先とおもつて若く春乃を家 嵐亭
 二月十日暖んんと今乃戸叩き
 おひと熱田乃方おはぬ波船遊し
 けあり乃おらる松乃方も元海を
 以て若葉あり重なる枝枝でけり竹
 塙社遊きふ支奈り女船の茶之を
 おのひ出はる

春のくやん清く乃侍勢集り 荷守

庚午乃喜家を焼く

燈小幸り けきとも墨の森を日し 世枝

三月六日晴ぬ亭少々

あう飯や細うの口ハの燈はくら 且葉

旧庵ふて紫且

多州木又見利しむる斗り野望 松尾

三月十日日曇り回家少法うそ

性のさや中しきる森荒か 世水

三月十九日舟乗り多々

山吹乃あふあき里終崩き 瓶人

峰小雲散りと吹ふ七文字かくて

米器や岸小雲散り 然巧し 流州

春乃河をそひ城やめく云暮の

はやし小庭を替す

かみ小蓋しを流也 和と梅 金井

春梅小梅少々

きのふ見し何事か 初 櫻 暮方

小庭雲散り我妻賦を笑す

雪小老々輕雲を和く 全

再び家の玉小飾り

春ハ根えあふ五尺乃地を好身 候屋

解中乃真由

水きりやふ物干江小飯膳 雲河

春面や流心曲輪乃小庭の春 堤守

春篠西子奉體月京の方木山亭小

狂ひ侍る留中の御は答ふ六分
斗り御の性のかきをて賜の所
なきあつとと折より侍る

居なきを侍るおまふなき空留中
其角
伊勢守御

常海守や如光の巻乃おまのう角
侍六
御意ふ答ふ

庭守ふおく候たり様か
春
愚費
芭蕉庵を坊ひく

雲守や十の返りもおま
梅
其角
か最ふ侍り

照鏡くおや酒守の定り侍り
其角
建邦
住居ふ侍る

一日の日残暮風や担乃
おぬ
全

侍婦ふ
至八乃流乃おま家
蕨の
車
東由

進きおれおま結おれおま
おま
米堂
上正井生おまおまおま

姫守や壁お持おま
紙
維
世故
夕暮の暮お城のまおまおま

病守の守りおれおま
おま
世故
暮提山おま

穀守ふ南守阿弥佛と
おま
守武
おまおまおま

清よおまおまおま
おま
世故
おまおまおま

高野山寺

散花ふたふたの如くなり 奥の院 杜玉

春風若葉深松少

空堂小窓空寂の如く 寺の里 聖水

雲煙如夢

是れ松の根を曲る 庵の如く 杜玉

雲の首を弄りて 雲の如く 聖水

雲の首を弄りて 雲の如く 聖水

雲の首を弄りて 雲の如く 聖水

長崎寺

雲乃雲少しく 雲の如く 聖水

雲乃雲少しく 雲の如く 聖水

雲乃雲少しく 雲の如く 聖水

云は是ありと 云はけき

赤霞乃西歌ふ 雲の如く 雲堂

大津五田正春の墓小系

消也散るや 山如月も 雲乃 聖水

弥生の末浪雲の大少子 聖人橋

乃飯宅と 迎降く

風下の松佐くや 雲の如く 先 聖水

宇治の玉川

山吹中 咲くを 離ハ 水乃 庭 窓聖

清なる水

山吹小引 裂衣の 秋ハ 誰 聖水

混歌

枚床かく 雲か 中ハ 菰乃 聖水

隅田川小舟をうかす
愛猷

舟持てとも小舟をうかす物
弥生十舟 隅田川小舟を
曳く
吐月

本如ち小舟をうかす舟子多
西上人と皆えしも舟持舟と
舟えしも只あり玉舟小舟
舟子多舟を曳

舟不死ぬ船ひハ船乃鏡
舟持の舟舟船を舟し
舟子日小舟風吹わたす舟
舟ひ舟を曳舟と誰彼舟舟小
舟持ハ舟舟舟乃舟舟舟
舟山
舟山
舟山

舟持ハ舟舟舟乃舟舟舟
舟山
舟山
舟山

舟持ハ舟舟舟乃舟舟舟
舟山
舟山
舟山

舟持ハ舟舟舟乃舟舟舟
舟山
舟山
舟山

舟持ハ舟舟舟乃舟舟舟
舟山
舟山
舟山

舟持ハ舟舟舟乃舟舟舟
舟山
舟山
舟山

舟持ハ舟舟舟乃舟舟舟
舟山
舟山
舟山

舟持ハ舟舟舟乃舟舟舟
舟山
舟山
舟山

舟持ハ舟舟舟乃舟舟舟
舟山
舟山
舟山

舟持ハ舟舟舟乃舟舟舟
舟山
舟山
舟山

舟持ハ舟舟舟乃舟舟舟
舟山
舟山
舟山

坐阿子やあこめ子安子奉女房
 程以きれ門焼坊主乃名祝以
 以形きや小松殿財乃繁き言
 吾月ハ袖ヲ祝ふ令小松引
 君引手亦も結ぶ令小松原
 七種や松子虎子子結握り
 七之店や跡乃松子ハ言乃骨
 鶏小公の今片き名蘇ハ
 若菜法み交物やむきん
 七色ふ言菜ハ言言言言
 言と島下出阿ふ若菜ハ言
 菜の啼や正岷乃若菜ハ言
 法と持下諸ハ言ハ言言言言

木導 沾圃 重打 白尾 字月 淵重 松隣 猿権 去来 去芳 浪化 曲衆 弘通

聖の細や勢退立々のむ若菜
 きのみまを思ふく理系若菜ハ言
 山様あるや小川乃水車
 是ハ今宗却ハれき言言
 系ハ言言言言言言言言
 若大や言言言言言言言
 灰若下白梅う侍正地根ハ言
 寺ハ名や言言言言言言言
 彼ハ言言言言言言言言
 木急の戦り言言言言言
 風の吹才言言言言言言
 人ハ言言言言言言言言
 梅乃芽を乃言言言言言

快那 茅因 空 乙物 文竹 元此 幸由 木因 翠尾 世ハ 信芸 水管

巻上 全房の形
 ○世一

多の考も宛一を家法の樓一の事 支考
学と云ふと人共見せぬ世老の事 運谷
後々八月七日好逢か樓一の事 泉石

○漫興夏之部

元禄四年末の仲月十六日嵯峨
小待ひて衣束の落付舎ふまで
凡兆と共にあつた昔不及ひ来
小待ひて衣束の落付舎ふまで
子待ひて衣束の落付舎ふまで
片福一疋ある夏休不と宅也
机一ツ破文庫白紙集此於を人
一首世陸物借源き物修不伏也

記此夏集と云茶廣乃為後集也
了五重の巻ふさ句く乃茶子を盛
り出酒を毒盛を添へたり物々の
象個葉の物も亦より持来りて
多しかりし茶田んせと志をなほ深
み多終りむ十九日午時辰川古小
治大井川家小湯きそ嵐山右まきく
松の尾の里小狭けり虚空巻子
懐人往り心多し松の尾の井藪乃
中不山督屋毒と云小物り都々上
下乃嵯峨小云不何り何きく健奈
く毛破り仲ふり物を止めたる

とを約止の格しよふは逸へな坊
 さい折々く是ふ名一すもや巻八之
 万巻の傳り藪の内ふ所り ありし年
 概を極たり所こくも縁補結羅
 のふお起外を流し藪中の産
 芥りと其ふ分まり 昭君村の柳
 夢の殿乃巻の芳せおひきれて
 憂卿一や舟の子と有る人乃 葉 翁
 嵐山若方後りや 風流 是 ち 左
 夕陽ふ及んて 落柿舎へ物る也
 北東よりありき来 来不 傳り有る
 伏せ北の北 隈城の巻尺物とて

相和尼喜去来 来より 来る金と
 中の吐とを語る

清美 あふ子娘の長や 妻 白 去来

落柿舎の巻の巻の造り
 ふしを家と類被せ中くふ作り
 みかききある巻の巻あり 今 不
 何を巻る巻の巻の巻を巻る
 剛せし果画了 巻の巻の巻の巻
 百ふ流て巻の巻の巻の巻の巻
 隠きたる巻の巻の巻の巻の巻
 とも巻る巻の巻の巻の巻

袖の巻や若巻とむ料理の内 翁

わらわの住む大井殿ともる月よ秋 全
又や春をば夜多子思ふは遠城の山 洞紅尾

去まらる思の空より葉子潤葉の
物あり送らるるそ宵に洞紅尾の
止めを憐れ強うそと中の人暮るう
し夜をい物も暮るるあを夜連道
より喬く秋空を星の葉子空を
ど夜出ると院庭をそを山に
去葉の暮に元形を葉子秋を二葉
の情怪を四五の人と依るをあり
四葉をそ葉も又四種を葉子空を
るそあともあごを空を葉子秋

きは洞紅尾葉子防る去葉程と
と出るそ二百時夜にねきり葉子空ハ
公むわううう空の気色もそ空
証す朝よりお曇り雨あり葉子
きハ終り眠り伏たり葉子及そ去
葉子葉子防るそ宵に人もあそ登伏
しなきハ物もあそ葉子葉子切
短尾をそ葉子防るそ及そ葉子
しそ葉子葉子世言ハ葉子の空あ
所りなふあ人も那く葉子葉子
むる葉子そ葉子葉子葉子
葉子葉子葉子葉子葉子葉子

然るに床を何ぞしとす哉子短不
るもの悲世何ぞしとす哉子短不
るもの悲世何ぞしとす哉子短不
うかへ何ぞしとす哉子短不
寂しとせよとあるし又何ぞ
山里ハこと又誰ぞ呼ぶ者やうり 芭蕉
獨任を起すおろひしものせし
生むをやかすし後き途を歩
隠士の回をハすりの果をたきハ
何ぞしとす哉子短不とす哉子
東をたきとす哉子短不とす哉子
予も又

ら北をを寂しかたせよ子 孝 孝
とある者不物居てとあり
孝可者其の消息を己の武に
より取り治るとて旧友ハ人の消息
甘んずる何ぞ其由曲家の状子
予の住持し芭蕉庵の旧き跡
をたねを字故不違しよ

若流 小鍋何ぞしとす哉子 曲集
又とある者何ぞしとす哉子
しとす哉子何ぞしとす哉子
何ぞしとす哉子

芭蕉 菜をよむるもの 一 巻 一 全

柏脊の塵ふらるゝ蕨のふ 嵐雪
出物りや程公の物おを老 全

きりひのこましく廿三のふ

手さうてを本魂小のり友乃月 去せ哉

舟の子や誰き村の縁のまはし 全

雲の獲や泪小際了啼雲雀 全

一川〜雲何らうまを〜雲雀 全

能あるの成は〜家とまやう〜し 全
題落村舎

豆梅子畑も未だ屋も名所らふ 九兆

書ふ及て去来家人のあゝ猶存

昌考より消息方深高白方消
息あり九兆東の堅田本福寺
訪平屋泊九兆京小路

題落村舎 文州

對深峨峯伴鳥巢 就荒喜似野人居

枝頭今又赤乱印 青葉分題堪州書

尋小督墳 全

強攬怨情出深宮 一輪秋月野村風

昔年僅得求琴韻 何處孤墳竹樹中

二牙出〜より二系子成る梅乃実 史邦

途中の吟

杜宇清や梅も梅を久ら 文村

杜門覓句陳無已 對客揮毫秦少德

しめ来りて武江の吐ありけ

情一巻にうちよ

半信乃一宵采入ハ情午

印井ハ味言をかハ一ホキ 正角

腰の養小狂ハ情有

世分より海人ハ海ハ小原をより 左

字津ハハ女子衣着を情で情

情せぬとゆふ情 進 左

申割斗りより風雨雷霆電降

る電の大あるハかきもの如くハ

きハ葉葉の如ハ一ホキ三分程ハ

控空を区る母電降る廿六ハ

芽生より二葉ハ茂る情乃 実 更那

島ハ空ハハかき雨ハ情 蕉

陽牛於母ハ氣あき角 情 去

人の服む言と約執情あり 丈

有明ハ三度情の情ハ情ハ 乙

廿七ハ人ハ情ハ情ハ情ハ情ハ

ハ杜園より多と云出ハ情情

と覚む

心練氣相交る村ハ愛と情ハ情

望と火と愛ハ情ハ情ハ情ハ情

花と情ハ情ハ情ハ情ハ情ハ

花と情ハ情ハ情ハ情ハ情ハ

常と夜寐ふはる時ハ蛇と夢見
と有り睡枕記魏安国莊周夢蝶
皆其理有テ妙ヲ尽サス素養ハ
聖人君子の愛ハ何レ法外ニ忘
想散礼の尊夜法の愛又去リ
待。此ものど愛するものと謂存念
羞也我子志深ク伊陽旧里中々
慕ひ集りて和ハ床を回シテ此
外外旅の勞ととも又助テ云々
おと彩の如くは伴ふある時ハ
あるときハ然レハ心志我心裏
小寐々忘るる事おけきハあは

覺て又袂を去る

廿四一人一着真妙言彼の法を見る

高館律天皇 似曾衣川通

悔り法有如弓其地風景静以不

叶古人といふも不空王地村ハ不

叶屋景。朝ハ江岳平田明昌寺

李由名台尚白千那消息也

舟の子や喧嘩さきし後法 夢 李由

明日の如き身不付身有 一の如 尚白

まされつる年月もあはし 舞 嫁 全

二の宮良集りてや一 妙の巻也
為下懸世も信持しよ

入知子りりや思ひよき也故の志 不
 やまわらふき守り流るる中より
 何事不後不心取む 宿り 主 涼
 縁とかつて有りて
 暑りやハ病湯けり 清水河り 全
 午村の程亦蘇字不傳らふ
 登龍の有りま程 宿 あり 全
 何人をもとのしよ吉き宿り
 を務むはるる 説く言せ流りけ
 りふそ云云をとりて
 石云く川委公あり 一 報 郵 大勢
 初下天府君も君甚と

道徳有り 牡丹の蓋りや 怡 牛 尊
 神奈川 卷既屋
 山くハ程を程や袖ヶ 傳 吐月
 七十餘歳を住し 先師の不
 の下で譲らまて
 流りやとよふたりの友 氷 全
 安麻子 五
 更長より 蹴らぬ器あり 一 園女
 流流り時をときむ流し 妙子地子
 入る希子の言をるる 子民神兒
 流流り時をときむ流し 妙子地子
 流流り時をときむ流し 妙子地子

宮島跡山

跡山と云ふ芥子合ふ能く白の事 支考

輻の泡鬼の飯あふふみ哉

紫陽花も似るぬ名をよふ山家云 乙二

何の女房ふやゆ

鬼やりの海しゝゝぬ赤きるを 杖之坊

うらみの女の馬柱好むけと書く

紫とよふ名と付たり

旅人の名はよくありぬ 五六軒 支考

牛一海を

粟とらふやりの力も田をこへは 文法

畑中貯る鼻も

宇原ふ似て山あつゝ善形兼云 支考

戸塚も

以有り左り鎌倉 船 松 奥 一 棟

家も此なり

啼く世もあせ杜鵑 宵乃 皇 聖 波

伴紫山田子系

都公系けあきやもらひ 啼 紫 堂

吉備津籠る傍も

佐細所名かきとあく 也 余 甚 支 考

藤と巻

表紫乃家とて巻らむ 而 埴 智 月

塔 跡 也

おののく相ふ並ふやみうし并 史記
紀後の玉八代を六月廿五日

水月や蜜柑の移る三 日 支考

紀後みく

山先の入るや外山の雲の峰 野城

不出古賀性の記述

夕支や名山古の鏡 乃 音 宗堂

出羽のふ方少海といふを

味しん時我小成せよ 乃 野城 支考

八十ふあゆむ若祖父の子孫の業

へり小法常守く死なれしとを

かり能まき守持

一筆ハ死装束や 六月廿五日 許六

任君常尾森を過す

う法ふも唯也四月廿五日 山根 宗堂

湯殿山みく

八重橋後着る日小 野りふ 免 雄茂

獲魚或隈の松

岸邊末ハ相も在殿中の落葉みく 宗堂

確氷原みく

園若ふ石也る笑詠の 若葉みく 白権

伊香保の記述

藤原也 藤原在島山通し 鴨 宗堂

武蔵比企野みく

字の香乃七尺昇る 百世 あり 全
十年を種々必洞のり和山のり

振嘆やりの来々々々々々 昔 雑家

祖翁の遺蹟 妙なる尾花の冬春
必のりやうり 埋もるる 毎々々々
たのり 徳墨ぬのり 持るる 〇〇〇〇
此及ふ 志 〇〇〇〇 〇〇 〇〇 〇〇
〇〇〇〇 〇〇〇〇 〇〇〇〇 〇〇〇〇

雲の 〇〇〇〇 〇〇〇〇 〇〇〇〇 〇〇〇〇 〇〇〇〇

〇〇〇〇 〇〇〇〇

〇〇〇〇 〇〇〇〇 〇〇〇〇 〇〇〇〇 〇〇〇〇

〇〇〇〇 〇〇〇〇 〇〇〇〇 〇〇〇〇 〇〇〇〇

報の 〇〇〇〇 〇〇〇〇 〇〇〇〇 〇〇〇〇 〇〇〇〇
〇〇〇〇 〇〇〇〇 〇〇〇〇 〇〇〇〇 〇〇〇〇

〇〇〇〇 〇〇〇〇 〇〇〇〇 〇〇〇〇 〇〇〇〇

○漫興秋之部

正大明白足看破千載

〇〇〇〇 〇〇〇〇 〇〇〇〇 〇〇〇〇 〇〇〇〇

是盛唐之風格 遷難見用カ
處所 〇〇〇〇 〇〇〇〇 〇〇〇〇 〇〇〇〇
人雅因一年中秋游廣汎觀
月適吟此篇初覺其精深爾
来尚翁益甚云

〇〇〇〇 〇〇〇〇 〇〇〇〇 〇〇〇〇 〇〇〇〇

月や阿のぬ家分つりの岸法阿 全
 宇と着いぬも出よ相守の月 宗
 山姥と路ふいぬもや堂のた眼 立
 粒やと粒一是子知る拭ひ撮 堂
 おとゆりも子返らぬ紅葉 梅
 清くくると赤きくや 纒 葉
 名月や見つめをぬぬ粒一よき 湖
 草ふ来よと堂押さる一葉の草 草
 口ふと堂下ふ乃月見と堂 言
 名月やと青生も子も何とむ 法
 法声をけけ字花堂の何とむ 如

表植

公家や各別あるおき 所 宗
 朝の宮いぬぬ里も何りたの月 西
 華いさありの宮も何りたの月 旧
 義を老くを登ふうの極大 浪

了哉訪人といふ

霧 笑ハ霧の智りふ森と杉人 森
 杉 樹あき雲と銀くを壁分引 全
 人 声ふ尾のあき粒の夕か那 和
 水 ぬ啼く霧きく粒乃極覺分 全

高松千人意之外

名月賢と堂と相あき 竹
 名月賢と堂と相あき 竹

○ 夕ふ死に等作うと思ひ免 二水
畫入情

○ 二ッ多らふさくもやせんさふの月 智月

高雅可入嵐雪去来空也

世學おのる袖と衣れたり

暮秋ハ風斗てもおろり華 世枝

豪放奇健有鬼貫之風

衣うのくも裸々生々華也 湖支

明秀

麻の夢心小角のあうけり 乙由

語意俱妙

形終とまわしおちる紅葉の 全

高秀

形月小物のほろろぬ海邊に 那水

一りの月

書字小月は豪も別海の上 若竹

二りの月

足るふもあしおき月の夕の形 全

三りの月

何より見えたる中は此三りの月 翁

四りの月

夕月秋形竹中へ替へる心 卜枝

五りの月

何より見えたる中は此五りの月 一泉

六日の月

その川見物に月夜 鈴巻

七日の月

経路ふゆをゆき月夜に車 一巻

十四日の月

雲海を望む月夜にふとを 鬼巻

十五日の月

名月やうき雲のむしの声 波水

十六日の月

ふきよひのきりぎりす 葉 菊

十七日の月

月の光をまらぬ内を来ぬき 落梧

九月十三夜

後の月よみはくしや秋葉子 李南

入 庵

片錦ふきをいしやきぬく次 那牛

雪かいたるりて庵ふ入きり

縁おほくはくしよ向やきりくは 珠露

水の光をまらぬ内を来ぬき 空

十五夜

明月や月よりおふ隈もわし 暮冬

十三夜

何のよみも桃紅きり十三夜 空

夕雲の繩巻

魂無怪乎むらふやあしう解 飛人

水橋漫真

雲より舞々おそく夕の月 佳村

羅漢寺

拈筆のいふよむの聲 香山

餅あつりもいふあり 扇 枯 白

良秋の清光よ二三子と共に

うのき出を善子の居海をん

と頼のありといふ酒屋の二白

ふと世のむらもと成のあま

つらうこさし

名月のあつる妙や 常 若山

景の古のほめり好まむ月ハ

此一秋も満きハ

依清の古たぐもゆり月の月 今

○漫興冬之部

芭蕉翁を寄り持りて

ふねのまき 藤 藤子 故春を思せし 大怪怪 如新

深子も飯ある家をまらけし

新くもよ葉家印の月冬 露 房守

笠の長途の西ふ院ひ残るの

と海くのあつるふあつる見

はるくたつるいひん家とく暮

はるくたつるいひん家とく暮

此ふも兒也なりし事也
此ふも兒也なりし事也

狂言のついでに
箱

おれつゝも
箱

知世はあやうも
壺水

注しおれつゝも
杜因

去りて
去りて

此ら重乃知れり
重五

田家肥屋

雲月や鶴のついでに
重五

寫さしめ
氣

寫しし牛の夕日
杜因

おれつゝも
おれつゝも

友袖ふ
惟然

云
云

飲料ふ
淳風

熱乞ふ
家友

温泉ふ
温泉ふ

寫さしめ
案文

冬
冬

物ら
全

長常奇像安手向吟
 清々ふ涼きふ市ひや家た葉
 露之清々鐘声村の田乃ひく巻り
 初冬也未だり新あ旧のわく
 雪ふらぬとて清らかなる家
 帝中宗
 海々年ふ雪々々雪々水寒山
 江月
 卷山
 六酷
 惟字
 一具

漫興四季之部終

○五十韻呼法

ア	イ	ウ	エ	オ	マ	ム	ミ	ム	ウ	ム	メ	ム	モ	ム
カ	キ	ク	ケ	コ	ヤ	イ	イ	ユ	ウ	エ	エ	ウ	ヲ	オ
サ	シ	ス	セ	ソ	ラ	リ	ル	ル	レ	ワ	ウ	ウ	エ	ヲ
タ	チ	ツ	テ	ト	イ	年	工	工	ノ	文				
ナ	ニ	ヌ	ネ	ノ	字	韻	二	字	類	似	ト	雖	モ	上
ハ	ヒ	フ	ヘ	ホ	載	セ	シ	如	ク	其	実	異	レ	リ

此五韻ハ母韻ニシテ一字一韻ヲ發ス
 餘三字ヲ以テ一韻ヲ發スルノ左ノ如シ

○似韻

○いひ、お○へえ、魚○お、を○ぢ、ト○か、く
わ○い、ま、い、わ○い、ほ、い、を○い、い、え○い
、い、ひ○い、ふ、い、う、ゆ、う○ろ、う、あ、ふ、ら、う、
ら、ふ○ふ、な、お、を○ふ、し、ふ、え○ふ、ひ、ふ、い
○ま、い、ま、ひ○ま、し、ま、え○ま、う、ま、ふ、あ、う
あ、ふ○い、い、ひ○い、う、ひ、や、う、ひ、や、う○や、う
と、を、ま、ふ、た、う、た、ふ○と、い、と、ひ○ア、う、ま、ふ

○ぬ、ふ、ぬ、う○る、い、る、お、る、ひ○お、い、お、ひ
○お、う、お、ふ、あ、う、あ、ふ、あ、う、あ、ふ○か、い、か
ひ、く、い、く、と、ひ、く、え、い○か、し、か、え○か、ま、
か、わ○か、つ、く、ま、つ○か、し、く、わ、し○か、く、
く、わ、く○か、う、か、か、ご、う、ご、ふ、く、さ、う○か
ん、く、さん○よ、い、よ、ひ○よ、ま、ひ、よ、さ、ひ○
よ、う、よ、ふ、や、う、や、ふ○え、う、え、ふ○た、い、だ、し
た、ひ、だ、え○ま、う、ま、い、ふ、ま、や、う、ま、や、ふ○ま

○雲雀

兼崎原申塚より平尾迄

西ノ原

約湯野

石川大井原

生麦造

葛餅

王子造

根岸梅屋敷

田端村梅屋敷 四十石

大久保百人町梅屋敷

四角新町梅林

能井石上神社

同梅屋敷外苑梅

向島新梅屋敷

同本母古

陽子奥山苑屋敷

小村井 江東園

赤子坂 宗泉堂

雑目ノ名島河 種本河 十世

青梅上神社梅林

同查到寺相子松門

手植梅 種上奥山苑 十世

○柳

八辻ノ原

糸橋ノ新橋宿

麻布美後寺池源野

不忍池新玉子

上野廣小路

下谷柳 福骨社

荒多山

福田川堤

浅草寺本橋

福田川寺常寺

木妙寺浅草橋

深川元八橋

青山之保河梅窓院後置

坊上寺等野上神社

必能藤印親善寺梅ヶ家

大井ノ芝村

目黒不動院石古坂

蒲田 山中三平中道村の梅

吉原堤元カノ柳

本母古原乃柳

綾瀨

○明月

福田川

宇石川

不忠池

○機 徳卷一重機が主妻方平
至官匠又六子月匠方
上野後軍

芝公署

比中蔵屋古 三三三

小石川清道院

其外命

香羽護持院

相模屋古

宮田砂利場末宗院

同石福神社

同穴八樓

比中野近道古子古

三崎新幡院

根津権祝社四

口等里

麻布屋尾 光林古

三田切運古

坊工古年古社

同山内徳運社

玉沼二本榎古

宮崎大佛

清原古 大野氏

大井村

大久保七面堂

小倉井五川上水

○八重様 去妻方
七十月匠方

上野公署

芝 公園

築地本郷古

比中古子古

比多古山

王子権現

志原付古河

日本堤

牛込築古河津

同東福古

同西光古

松本村急務古 古必山様

青山古若丸 古必山

比中野古幡屋古

川崎山王社地

比中野古必様の古場

○柵 去妻方
六七月匠方

福田川堤

川崎古大砂河系道

同所古河田道

比中知道

大房
増林
○ 緋栳

上野谷中ノ道

深井より西ノ系道

○ 幸 走 五葉より六十日

上野谷那志の系

戸外のみ中道

○ 椿 五葉より六十日

上野車坂

○ 柳干

深川沙崎

子路本筋下
福田川本筋下
加瀬子源寺

下平井川岸通

○ 梨葉 五葉より七十日

深谷屋原系

市場村 高河ノ道

大塚の系より中島迄

下総市河ノ幡迄

木 迄

○ 蓮花

玉川外石山

系川

生麦

林系川

○ 大根系

三河島

十條

綿付

練馬

冥屋の里

高住乃境

尾久の系

炎口の法ノ道

同原四村法法寺
極小所ノ

三河島辺

○ 蕨

駒場野

小倉井宜津の道

○ 大草 萱 薔公葉

沼田川境

野大石ノ系

○ 横家

戸田河系川

○ 碎米葉

廣尾

上草ヶ原と云

落合

本所尾津高の造

荒木田の系

西ヶ原より尾高山迄

玉川

向島茶屋敷

平井屋敷ハシ

増上寺赤羽権門田

蒲田新屋一

○ 鵜飼立家の邸

果ヶ原稲荷社

王子稲荷社迄

尾久の系

戸田の系

落合

取川より目黒迄

○ 榎桑

宮田長砂門堂前

大久保井土人町

角岩十二社他の迄

品川七五石坂

深井橋本屋

雑玉ヶ原迄

相津権現社

日吉里

喜羽渡玉古

高田穴八幡社

○ 藤 立文村の目匠

以中羊坂下 茶茶屋

不呂屋七社

能井戸七神社

砂村大智稲荷社

梅子湯茶屋

小口向島骨川

築地古引橋茶屋

○ 夏之部

○ 新樹

上野公署

根岸

王子蔵の川

同原外動他迄

稲毛深川系

玉川周堂村

喜上余布屋之 南世三石井

上世津村

大崎田の端

申延村 古屋

増上寺赤桐柁門内
 四ツ目土瓦本業屋
 ○牡丹 立妻より二六〇日
 深川 永代古庭
 向島花屋敷
 浅草茶屋一基
 上野津院
 四ツ目新町造世本村
 川崎橋乃屋
 ○燕子茶 立妻より
 二〇〇日
 堀切村
 根津権現
 護国寺
 目黒祐吉寺
 向島茶屋一基
 本母寺
 本下川茶所
 ○杜鰐 立妻より
 三〇〇日
 駿河臺
 麻布
 深谷
 小石川初音の里
 護国寺山
 根岸

高田
 八ッ山
 ○昔茶 少満の以
 向島茶屋敷
 下北津村 佐治寺
 ○平茶 少満の以
 茶膳庫中堀の王子辺
 桑津九品佛
 大塚の系より塩漬造
 ○相茶 芒種後
 向島茶屋一基
 浅草桑山
 赤坂桐畑
 石根村
 ○水鏡 芒種後より
 不器乃池
 浅草が系
 向島
 根岸
 羅漢寺造
 ○茶菖蒲 立妻より
 堀切
 王子反浦
 目黒造

○霸王樹

鶴見村 霸王樹葉也

松戸村 某軍

○岩 友玉の江

江戸川端

美口芭蕉菴の造

高田安見塔の造

大塚根本段五南

○蓮 小島後世日記より

小島池

下島池の妙音寺

赤坂溜池 日知川外

比井宗林寺管原

鎌の口宿石橋 久地村辺

浅草五南

日光道古の宿より西指

洞辻村造

○合歡云 小島江

綾瀬村

美口流乃造

○管草

美津

○鮎 鶴川

玉川 五月より九月の
江戸川

増上寺舟乙池

浜田村世丹多池

目黒長泉律院

子位

常々舟舟辺は怪

山城町は怪

目黒屋

○粒之部

○虫

活葉の水

原野麻申塚より王子石

雑子より畑道

○納涼

南金橋造

隅田川

小島池の造

上野廣小橋

赤羽松川造

○鶴

西ヶ原

駒場地

○七叶 美濃の江より

向島茶屋より

赤子坂

西ヶ原

道漕止

根岸

廣尾の原

○萩 白糸の原

龜井戸就勝寺

白鳥宗屋

龜戸神社

歩学宗屋

山中寺

蒲田和井殿

山下清門

歩学宗屋

○女形

小倉井宗屋の道

義之原宗屋の道

廣尾の原

野村

石田乃原

庫中操造

○石 波岸後四本小倉

福田川

綾瀬

深川海崎

級沼橋清門内

○芒

○月

清菜の水

不忍池邊

福田川

綾瀬

深川海崎

小倉本川

月北岬

言神

神奈川の原

玉川

川城三芳野乃里

目白原

九段坂上

杉田 月の名所の入り橋本

五川 深川海崎の入り

玉川村和蓮寺

武蔵野

○本橋 兼不

玉川村和蓮寺

湯島聖堂

沼五長谷寺

○ 檜江系

三田新堀場

高野山堀場

赤坂堀池造

本所池船倉前

○ 紅系 立寄後寺

上野公の墓

招津権親

日暮里

道灌山

清中堂子坂 枯木屋

染井

流乃川

護玉寺

海学栗山

山名橋陣瓦方寺

角管

立間以拉馬寺系楓

早川東海寺

回津安寺

目黒不動境白

○ 菊 立寄坂

向島

西ヶ原王子道

系鴨池本屋

向島系屋一寺

寺島村諸地村畑中

沙草系屋一寺

目黒

○ 冬乃部

○ 枯野

武蔵野

○ 山系 立寄坂

中野宿仙寺

向島系屋一寺

沙草系屋一寺

大塚の原

雑司が谷分堀の内道

原尾の原

上稲毛鍋持一寺

○ 系系

上野

王子道

日軍道

湯島上林堂

目黒

日暮里

道灌山

○松雲 五冬法

沙学田町合方福寿社

深大寺村 左京寺多嘉
修の廻九尺余

○雪

浅原ノ水 又世持ノ聖堂の方
又の邊修あり

神田社

上野宮山

上野公室

芝公室

江戸見坂

○雜之部

○街 桑月あり

死鳥山ノ王子造

滋川并天造

渡玉寺渡内

関口目白産

沼田川續遊造

丸根坂造

中川海堤

○白魚舟

佃沖

玉川向ノ宮

○松 村田の名本かぞへあり
十ノ一をあかしの

日暮里寺雲古道海

不川

佃島

深川

神奈川

浅茅ノ原衣掛松

株多妙見松

小森木川五本松

目黒不動寺居松

○鶴

六ノ

小松川

三河島

新繁松

根岸墨光寺鏡松

回廊杉松

浅草寺首尾の松

浅草寺三本極

目黒新町極寺

麻布一本松

目黒産田川鶴松

○榎

本所寺書森相生榎

○榎

目黒

○ 柳 島

陽 田 川

○ 五 二 山

牛 込 不 二 見 寫 場

駿 河 臺

駿 河 所

武 藏 野

五 川

品 川 大 森

小 梅

○ 夕 陽

墨 田 川

日 暮 里

目 黒 川 石 段 夕 日 山

五 川 弁 善 寺

唱
撰 俳 諧 七 百 題 卷 之 終

